

「私の履歴書：高柳健次郎」取材の思い出

元日本経済新聞社 和田哲郎様

ただいまご紹介いただきましたように、私は1982年、昭和57年ですが、その2月に日本経済新聞の文化面に連載された高柳健次郎先生の「私の履歴書」のお手伝いをさせていただきました。そういうご縁でこのビクター高柳会にお招きいただいて大変光栄であると同時に、大きな不安を抱えています。

と言いますのは、なにせ30年前のお話で「私の履歴書」自体はこういう形で記事は残っているんですが、取材ノートとか資料というものは残っておりませんので、薄れゆく記憶をたどりながらのお話となってしまいます。

それと私自身リタイアして10年以上た

っているものですから、人前でお話するという機会がありません。大変お聞き苦しい話になってしまうと思いますが、その点はどうかご容赦いただきたいと思います。



当時私は編集局の産業2部というところの次長、いわゆるデスクをしておりました。デスクというのは出先の記者が書いた記事をなおして、ニュースの価値判断をするという仕事です。現在は組織が変わってしまってもこの部はないんですが、どういう部だったかと申しますと、広い意味での機械産業ですね、電機、機械、それから自動車、造船を含む輸送機械、そういう産業を取材するセクションでした。

当時高柳先生は、日本ビクターの副社長から退かれて顧問をされていました。日本ビクターには私は記者時代にたびたび取材におじゃましておりましたので、この仕事がまわってきたんだと思います。

先生はテレビの発明者であり、前年には文化勲章も受賞されているわけですから、「私の履歴書」に登場するには非常にふさわしいお方だったと思います。ひょんなことから私がこの履歴書を担当させていただくことになったのですけれども、その時高柳先生と私と何かご縁があるんじゃないかと感じたことが二つあります。

一つは高柳先生がお生まれになったのが現在は浜松市になっているようなんですが、当時

は静岡県浜名郡和田村という村なんですね。小学校も和田小学校にあがられたそうなんですが、私と同じ名前の村と小学校ということでなんとなくご縁を感じたわけです。それともう一つは私ごとで恐縮なんですけど、私は終戦直後テレビを見てるんですね。私は横浜に生まれ育ったんですけども、横浜で終戦直後に博覧会があったんです。あとで調べてみたら、昭和24年に日本貿易博覧会が横浜でありました。伊勢佐木町は今はいぶ寂れていますが、当時は横浜一の繁華街だったんですね。その伊勢佐木町の通りの裏になんと飛行場があったんですね。もちろん当時はジェット機などはありませんから、プロペラの米軍機が発着するような飛行場になっていたんです。多分それが米軍から返還された跡地だったと思うんですが、博覧会はその伊勢佐木町の会場と反町、東横線に反町という駅がありますけれど、その駅のそばの2カ所に分かれて開かれたんですね。私は父親に連れられて両方行った記憶がありますが、テレビを初めて見たのは反町の会場だったと思います。それはどういうものだったかというと、モニターがこうあって別の部屋で映した画像を皆に見せるというような仕掛けだったと思います。父親が、「これからこういうふうに遠くのものが家にいて見えるような時代になるんだ」と言っていたのを覚えています。このデモンストレーションにひょっとして先生が関わっておられるんじゃないかと思ったのです。先生は当時ビクターに移っておられたので大いにありうるなあとあって、さっそく先生にお聞きしたんです。そうしたらまさにその通りで、このデモンストレーションは日本ビクターが出展したものだったんですね。「私の履歴書」にもその話は出てきます。ただ、そのデモンストレーションは無線でなく、有線のテレビでした。そんなわけでこの会場で先生をお見かけしてるんじゃないかと思っておりまして、高柳先生の「私の履歴書」を担当するにあたって、ちょっとご縁があるんじゃないかなと考えたものです。

ここで「私の履歴書」はどうやって出来上がるのかということをお話しておきます。大体のケースではご本人のお話を担当記者が聞いて、記者が書くというのが殆んどですね。もちろん原稿はご本人にお見せして、直すところは直していくということです。小説家なんかはもちろん自分で書かれる方が多いですけども、一般の方はこういう文章を書きなれている方はあまりいらっしゃらないものですから、大体そういう方式をとらせていただいております。最近では数年前に登場した有馬稲子さんは、全部自分で書いたと聞いております。

話を聞いて書くわけですから、取材は2回や3回では済みません。私もおそらく10回以上先生のお宅に伺ってお話を聞かせていただきました。

先生は当時、逗子の披露山に住んでおられました。披露山というのはご承知でしょうが、逗子の閑静な高級住宅地ですね。先生のお庭からは石原慎太郎さんの邸宅が見えたのを覚えています。当時石原さんは政界に出る前だと思いますが、披露山に住んでいたんですね。余計な話ですが披露山はどうしてこういう名前がついたかというと、戦国時代に武将たちが合戦の後に自分の戦利品を丘の上に持ってきて、互いに披露し合ったというところから

披露山という名前が付いたと、その時間いた覚えがあります。

文化勲章受章者であり大変な方なので、取材の前日・当日はだいぶ緊張して先生のお宅へ伺ったんですけれども、この写真にございますように非常に柔和な笑顔で迎えていただきまして、大変リラックスして取材を進めることができたという記憶があります。その時感じたのは、先生は目がものすごく良かったんですね。先生は1899年生まれですから、当時82歳だったと思うんですが、眼鏡なしで新聞を読むことができました。今は新聞の活字は結構大きくなっていますが、当時はものすごく細かい活字だったんですけれども、それを眼鏡なしで平気で読めたというのでびっくりした記憶があります。



和田哲郎氏と高柳先生 当時財団パーティーにて

先生のお宅には奥様と住み込みのお手伝いさんがいらしたと思います。先生のご記憶があまり定かでないというようなところは、奥様にお聞きになって確かめたりされていました。この奥様は先生を本当に支えられたというか、先生ご自身が「糟糠の妻」というように表現されておられます。履歴書にも出てきますけれども研究費が足りなくなった時には結婚の際の奥様の持参金300円を出してもらったと、そんなエピソードもあったそうです。先生は奥様のおかげで、後顧の憂いなく研究に尽くすことができたと書いておられます。また文化勲章の受賞式に奥様を同道出来たことが非常に嬉しかったと書いておられます。

それはともかくとして前年の秋から準備を進めた「私の履歴書」は2月1日から連載が始まりました。2月ということで、新聞の定休日が各月にありますので2月は27回の予定だったんですけれども2回オーバーして、結局3月2日に終了したと思います。現在はひと月ごとに必ずその月で収まるようにやっていますが、その当時は融通がきいたんですね。文化部長から「面白いから2回くらい追加してくれ」と言われて、2回延びたというのを覚えています。

これはひとえに先生の生き様といいますか、ただ興味深いというだけでなく、先生の生き方に共感を持たれる読者が多かったからではないかと思います。

連載が終わって先生のホームコースである鎌倉カントリークラブで打ち上げのゴルフを一緒にさせていただいたのが、いい思い出になっております。

ここで「私の履歴書」というコラムが、どんなものかということちょって振り返ってみ

たいと思います。日経の文化欄は、ちょっと自慢話になりますが、経済新聞にも拘らず非常に評価が高いんですね。何十年も前でしたが、菊池寛賞を受賞しております。人によっては、日経は最終面から読む新聞だと言われる方もおられますし、「経済の日経」ではなく「文化の日経」だということを言って下さる方もいらっしゃいます。その文化欄の中でも「私の履歴書」は目玉になる、名物コラムといってもいいと思いますね。これを読むために新聞をとっているという方もかなりいると聞いています。

その「私の履歴書」ですが、1956年、昭和31年3月に始まりました。ですから来年で満60年になる。同じコラムが60年続いているというのは、新聞でもあまりないんじゃないかと思います。その第一回は、どなただったと皆さんは思いますか？

第一回に登場したのは、意外にも当時、日本社会党の委員長をされていた鈴木茂三郎さんだったんですね。話がそれますが鈴木茂三郎さんには私も思い出があります。私は大学時代自治会の委員をしております、学園祭といいますか大学祭で各党の党首討論会をやるという話になりました。私は日本社会党を担当して、鈴木茂三郎さんのところに出演交渉に行き、当日は先生車で先生の横にちょこんと座って大学までご案内したという思い出があります。

その「私の履歴書」ですが、最初はお一人で一週間だったんですね。一週間ごとに人が代わるということだったんです。それでスタートしたんですが、だんだん延びて今のようの一ヶ月一人という形に後になりました。

よく日経の「私の履歴書」は、財界のお偉方の自慢話じゃないかという悪口を言われる方もいます。まあ、そういうのもないわけじゃありませんが、登場人物を見ると実に多岐にわたっているんです。財界人・政治家はもちろんですが、文学・美術・音楽・演劇などの、いわゆる芸術分野ですね。あるいは芸能関係・スポーツなど。今までどんな人が登場したのかとリストを眺めていたんですけれど、こんな人がという方がいらっしゃいますね。文学界では正宗白鳥とか室生犀星・佐藤春夫・里見弴・久保田万太郎というようなとてもない人が「私の履歴書」を書いているのにびっくりした記憶があります。

文学関係ではありませんが、いまNHKの朝のテレビドラマでやっているマッサンのモデルになったニッカの竹鶴政孝さん、この方も書いておられます。ちなみに「日経Bizアカデミー」というサイトをぐらになると、この竹鶴さんの履歴書の復刻版をやっておりますのでご興味のある方はサイトを見ていただきたいと思います。

1991年に初めて外国人が「私の履歴書」に登場します。その第一回は、アメリカの上院議員のフルブライトさんです。フルブライト奨学金などで日本との関係が深いので、第一回に登場する外国人としてはふさわしい方だと思いますけど。その後外国人では、サッチャー英国首相とかブレアさん、マレーシアのマハティールさん、シンガポールのリー・クアンユーさんとか、ブッシュ大統領も登場しています。スポーツ関係では、ゴルフのジャック・ニクラスも書いていますし、トム・ワトソンも3年前に登場しました。

「私の履歴書」というコラムは読んでいる時は面白いのですが、毎日毎日のことですからちょっと時間がたつと忘れちゃうんですね。ですけれど、何十年たっても何か忘れられない場面というのがあります。

私の個人的な感想ですのでお聞き流し下さればと思いますが、版画家の棟方志功が「私の履歴書」に登場した時のことをもう何十年もたってるんですがいまだに覚えています。ご存知の通り棟方志功は青森の出身で、若い頃上京してくるんですね。その頃は全く無名の青年でしたが、当時、横山大観は日本画壇では押しも押されもせぬ大家で、渋谷の南平台か松濤だと思いましたが、広大な邸宅を構えていたそうです。棟方青年は上京後まもなく一人で横山大観邸の門の前に行って、中に向かって「横山大観、何するものぞ！」と大声で叫んで帰ってきたというんですね。ただそれだけの話なんですけれども、いい話だなあと思って何十年も前ですけれども私は覚えています。

さて高柳先生の「私の履歴書」で忘れられないシーンはどういうシーンかなと考えますと、やはり「イ」の字が映ったという話ですよ。これはあまりにも有名な話ですけれども、「イ」の字が初めてブラウン管に映った。つまり世界で初めて電子式のテレビジョン実験に成功したということですね。先生のこれまでのご苦労、先生の履歴書を読んでいただくとわかりますけれど、本当に開発の苦労だけでなく研究費をどう確保するかというような、そういう研究者にとっては雑務の苦労までされているわけなんですけど、その苦労が実った瞬間ですね。非常に感動的な場面だったと思います。

大正15年12月25日、クリスマスの日ですね。帰り道に、寒く凍てついた夜道で「大正天皇崩御」という号外を配る鈴の音が聞こえたを書いてらっしゃいましたけど、非常に印象的な忘れられないシーンじゃなかったかと思います。

こういうシーンだけでなく全体でみて先生の履歴書がどうして読者の共感を呼んだのかその理由を考えてみたいのですが、先生が目から鼻へ抜けるような秀才では決してなかったということですね。その点があると私は思っています。

よく秀才はいますけれども、はっきり言って秀才が書いた「私の履歴書」はあまり面白くないのが多いんですよ。まあ一番面白いタイプは田中角栄さんみたいな成り上がった人というんですか、そういう人が一番面白いんですけれど。よく世の中に、目から鼻へ抜ける秀才がいますよね。私はその目から鼻へ抜ける天才というと、フランスの数学者のガロアのことを思い出すんですけれども。ガロア理論で有名な19世紀初めの数学者ですね。彼が小学校の頃、先生が1から100まで足したらいくつかと聞いたんですね。そうしたらガロアはほとんど時間をかけずに答えを出したっていうんです。それはガロアが計算が早かったということではなくて、どうしたら答えが得られるかという方法をすぐ見つけたということなんですね。ご承知の方もいらっしゃるかもしれませんが、両端を足していくんです。1と100を足すと101、2と99を足しても101、3と98を足しても101・・・50と51を足しても101。ですから101×50で答えが出るわけですね。計算じゃなくて、そういう方法を小学生が瞬時に編み出したというのは凄いことだと思

ますね。まさに神童というか秀才というか、そういう人だったと思います。ガロアは秀才だけでなく血の気も多かった人だったそうで、フランス革命に同調して投獄されて仮出所のとき友達と喧嘩・決闘して負けて、21歳で死んだんですよ。21歳で死んで数学史上で渾然たる光を放っているわけですから、これは本当に大秀才ということは間違いないと思うんですね。

先生はこういう秀才じゃないんですね、決して。ご自分で仰ってましたけど、小学校の頃は身体が弱くて、しかも動作が鈍くて、学校の成績は丙と丁ばかりだったと。甲乙丙丁の丙と丁ですからね。そういう子供だったと言われています。小学校を出ても学校の成績も悪くてしょうがない。浜松の薬屋に奉公に出されることになったわけですね。丁稚奉公に出ることが決まって、ひょんなことから高等小学校に進む機会が巡ってくるんです。それはどういうことかという先生のお住まいの区長さんが先生のお宅に伺った時に、障子の破れたところに先生の書いた習字が貼り付けてあった。先生は学校の成績は悪かったけれども、機械いじりや模型を作ったりは大好きだったそうで、手先はかなり器用なところがありまして、習字は結構うまかったらしいんですね。その区長さんがそれを見つけて、「こんなうまい字を書く子供は、高等小学校へ入れた方がいい」と、親を説得してくれたといひます。それで親も渋々ということで、高等小学校へ進むことになったわけです。その高等小学校で渡瀬先生という学校を出て3～4年の若い先生に指導されたのが、先生の大きな転機になるんですね。

その渡瀬先生は、子供のひとりひとりの長所を見極めて教育しなければいけないという考えの方だったようで、高柳少年にまず算数の問題を出す。二日かかっても三日かかってもいいから自分で考えて答えを出しなさい、と。で、二日かかって答えを持っていくと、「ああ、よく出来たね。えらいもんだ！」と言って、もうちょっと難しい問題を出してくれる。それをまた持っていくと、また褒めてくれる。そしてまたもうちょっと難しい問題を出す……。こういうことを繰り返しているうちにだんだん本当にできるようになってくるし、自分だって考えれば出来るんだという自信につながってくる。

そういう教育を受けて高等小学校に入った時は下の方の成績だったようなんですけども、卒業する頃にはもう上から何番目という成績になって、その後静岡師範に進まれ、蔵前の東京高等工業、いまの東京工業大学の前進ですね、に進まれたわけです。

今月の「私の履歴書」はホームランバッターの王貞治さんですね。元旦の第一回で、王さんは「自分は頑固で不器用な野球人生を歩んできた」と書いています。そもそも王さんは一本足打法が有名なんですが、その一本足打法も不器用が故に編み出された打法らしいんです。というのも普通にバッテリーボックスに立っていると、不器用なものだからピッチャーのタイミングにどうしても上手く合わない。ということでピッチャーの動作に合わせて足を上げる一本足打法を編み出したわけなんですけど、それも不器用の産物、窮余の一策だと書いていますけれども、一本足で打つんですからどうしてもボールを引っ張って打つよ

うになります。ですからボールは左打者ですから全部ライト方向へ飛ぶ。そうすると相手チームは王シフトを考え出して、1・2塁間をせばめて守るので、1・2塁間のゴロはヒットになるはずでもほとんど捕られてしまう。その代わり、左の方はガラ空きになります。器用なバッターだったら左の方へ流し打って打率を稼げるという人もいるわけなんですけれども、王さんはそういう器用さは持っていなかった、しかしそういう器用なバッターだったら、今の自分はなかっただろうと王さんは書いています。もちろん左右に流し打つのが悪いというのではなく、それを信条として高い打率を上げた一流バッターもいるわけですから、それはそれでいいんですけれども、やっぱり本来不器用な王さんに合わなかったということですね。その器用さがなかったおかげで、「天下のホームラン王」になれたと王さんは書いていますけれども、先生も全く同じだなあと思いました。不器用ですけれども一つのことを貫いていく頑固さ、それが成功に結びついたんだと思うわけです。

「私の履歴書」の中で先生は、「私は知恵が早く働いて、うまくやっていくことは不得手だから、やはり亀のようにコツコツやるしかない」「はじめは下手でも根気よく努力を続けていれば、必ずものになる。これは終生変わらぬ私の信念となった」と書いておられます。それともうひとつ、「考える力」ですね。履歴書の中でも「考えることは、誰にも負けない」と書いておられますけれど、要するに器用な人はすぐ答えが出ちゃう。よく考えなくても本当に頭のいい人は、すぐ答えが出ちゃうんですね。先生はよく考えないとわからないという少年時代を過ごしてきたので、考えに考えて考え抜くという習慣がついて、考えることなら誰にも負けないという心境になったんだと思うんです。

王さんと同じで「不器用で頑固」だったというところが、先生を成功させた要因ではなかったかなと、私は思っております。

それとやっぱり「先見性」ですね。テレビを考え出した時のいきさつをお聞きしますと、ラジオが大正9年、1920年にアメリカで世界で初めて放送が始まったんですね。翌年にラジオの受信機が日本に来ました。その時、先生はラジオは音声で情報を伝えるものだけれど、将来は画像で情報を伝えるような時代になるに違いないと。その時点ではまだ日本でラジオの放送が始まっていないような時点で、そういうことを構想されたという、先生はこういうふうに書いておられます。

「もうすでにラジオは遅い。20年先、30年先、どんな研究をしたらよいかを考えた時、ラジオは遅い」と。東京の歌舞伎公演が浜松で見れるという、こういうようなことを目指すべきだと。ラジオの放送がまだ始まらない時点で、そうお考えになっておられるわけですね。そういう先見性が、先生を成功に導いた大きな要因だと思います。そういうように不器用が故に考える力がものすごくついたということと、努力する力それに先見性ですね。それが先生の大きな成功要因となった。またそういう生き方が、多くの読者の共感を呼んだということだったと思います。

とりとめのない話になってしまいましたが、私が「私の履歴書」を担当させていただいて、

昔を思い出しながらお話をさせていただきました。どうもご清聴ありがとうございました。

司会：和田様、大変貴重なお話、どうもありがとうございました。

以 上